

## 加藤由紀子先生を偲ぶ

加藤由紀子先生が、今年7月21日にご逝去されました。ここに慎んで哀悼の意を表します。

加藤先生が不帰の客となられたことを知ったのは、21日の朝、50周年記念事業のご寄附のお願いのため、企業訪問する公用車の中でした。同行の古口副学長から、別科の兼任講師の方から一報が入ったと知らされたときです。先生が体調を崩され、病気休暇中だとはお聞きしていましたが、まさか亡くなるほどの大病を患っておられたとは思いませんでした。

本学では、2014年から、岐阜県世界青年友の会の要請を受け、香港城市大学専上学院の学生代表団約20名を毎年受け入れ、「日本語研修・日本文化体験」事業を行ってきました。

留学生別科の講師の方々の協力をえながら、この事業の中心となっておられたのが、加藤由紀子先生でした。今年は7月11日から3週間の研修が予定されており、病気休暇中であっても、体調が良ければ、最初の講義は是非やりたいと意欲をみせておられたと聞き及んでいましたので、訃報をお聞きし、内心動揺を隠せませんでした。

全国数ヶ所で実施される事業の中でも、岐阜プログラムが一番成果をあげ、学生たちにも好評だというのも、加藤先生や関係者の方々のご尽力の賜と感謝致しております。

加藤由紀子先生は、岐阜市のご出身で、1970年に岐阜県立岐阜高等学校をご卒業後、横浜国立大学教育学部国語科に進まれました。大学ご卒業後は、国語科の専攻生となられ、77年に横浜市鶴見区にある小学校から高校までの12年間一貫教育で名高い聖ヨゼフ学園の教諭に就任されました。82年に同学園を退職され、岐阜市に戻られ、岐阜大学教育学部聴講生、名古屋大学言語センター研究生として研鑽を積んでおられます。

加藤先生と本学の係わりは、1994年に経営学部経営情報学科を開設した折、当時の文部省の方針で本学初の外国人留学生を受け入れることになり、留学生に対する日本語教育を担当していただくため、95年に兼任講師をお願いしたことが始まりです。その後、

18歳人口の減少とともに、大学淘汰の時代、大学氷河期などと喧伝される中、外国人留学生が増加し、留学生の日本語能力の拙さが教育に大きな影響を及ぼすようになりました。当時教務部長だった私は、既にそうした問題が起こることを予測し、入試広報課長だった岡本高廣氏と留学生別科を設置することを検討していました。文部省には、主任教授として朱實先生を届出ていましたが、別科の実質的な責任者として、外国人留学生に対する日本語教育のエキスパートである加藤先生に白羽の矢を立て、当時の池永輝之学長に無理をいって、経営学部の専任講師としてお迎えすることにしました。その後、先生を中心に講師の方々の協力もあり、別科の運営も軌道に乗り、カリキュラムも充実したものになりました。

加藤先生には、個人的にも親しくお付き合いさせていただきましたが、非常に濃やかな心配りのできる方でした。会議で疲れ、キャンパスを歩いているとき、よく優しいお言葉をかけていただき、勇気づけられたことが度々ありました。

先生は、2013年度異文化体験事業を「スポーツを通してアメリカの文化を知る」というテーマで企画され、御主人のJohn氏とともに10名の学生を引率し、2014年2月19日から25日までフロリダ州フォートマイヤーズを訪問されています。帰国後、報告会を終えられ、3名の学生とともに学長室に来られ、お土産にFGCU（フロリダ・ガルフ・コース大学）のマグカップと大リーグ・スプリングトレーニングの公式ボールを頂戴しました。その時、学生たちと旅の思い出を楽しく語っておられた先生の暖かい笑顔が今も眼に鮮明に焼きついています。大学HPには「私が予想していた以上に学生が力を伸ばし成長していった姿を見て、若い人には無限の可能性があることを改めて認識する旅行でした。」と記されています。学生の随行という旅でしたが、加藤先生御夫妻にとっても印象に残る旅ではなかったかと、私の心も少しばかり慰められる思いがします。

人生の大半を外国人留学生のための日本語教育に情熱を傾けてこられた加藤由紀子先生を私どもの大学から失ったことは残念でなりません。今はただ先生のご冥福を心からお祈りするばかりです。どうか安らかにお眠りください。

2016年12月

岐阜経済大学学長 石原健一  
岐阜経済大学学会会長